

農薬豆知識

病気のお話〈小豆・大豆の茎疫病について〉

2010年は5月の低温・長雨で、各作物に様々な影響があったと思います。6月は記録的な高温もあり作物の生育遅れこそ取り返しましたが、7月に入ると降雨のある日が多く、様々な病気を抑えるために苦労されたのではないのでしょうか。今回は小豆・大豆の茎疫病についてです。



Q1:小豆の茎疫病の病徴は？

A:一般的に茎疫病と呼ばれるものは、本葉展開後から7月頃、茎の地際部にすじ状の病斑を作るものです(写真参照)。条件によっては幼苗期からでも発生するため、立枯病のような症状になります。なお、ピシウム苗立枯病という病気も別にあります。この病気の場合は種子が腐って発芽しないか、発芽しても幼根の生育が著しく抑制されます。茎疫病の進展の仕方は、茎の地際部から上部にかけて楕円形～すじ状の濃緑水浸状病斑を生じ、病斑がさらに拡大すると白い粉状のカビが付きます。二次的にフザリウムやアルタナリアなどの雑菌が寄生しやすく、淡紅色または灰褐色のカビが付くことが多いです。



Q2:大豆と小豆の茎疫病は同じ菌？

A:馬鈴薯の疫病も含め同じフイトフラ属の菌ですが、「種」が異なります(一覧表参照)。

(疫病・茎疫病の菌種)

作物	病害名	学名
ダイズ	茎疫病	フイトフラ ソジャエ
アズキ	茎疫病	フイトフラ ヴィグナエ
パレイシヨ	疫病	フイトフラ インフェスタンス

学名では「属+種」で菌種を表します。よく聞くところでは、小麦の赤かび病菌のうち、DONを産生する一番の悪者フザリウム・グラミアラムと呼びますよね。同じフザリウム属でも種が違うフザリウム・アベナシウムはDONを産生しないので、特に分けて呼ぶことが多い名前です。大豆の茎疫病は小豆の病徴と若干異なり、褐色の病斑が拡大する茎の全周を覆うようになり、根も褐変するため根腐症状を引き起こし、株全体が枯死します。

Q3:伝染経路や発生環境は？

A:卵胞子で越冬して土壌伝染します。卵胞子は土壌の高水分条件下で発芽し、多量の遊走子が伝染源になります。遊走子は鞭毛を持ち水中を泳ぎ移動します。特に水田転換畑などの排水不良条件で発病が激しくなります。また、病原菌の生育適温は28℃前後で、土壌水分も合わさった好適条件では急激に発生し蔓延します。

Q4:防除法は？

A:連作を避ける、排水対策をすることが基本です。農薬での防除は発生前からの予防散布が基本ですが、発生時期が一定しないためなかなか難しいのが現状です。天気予報で大雨が予想された場合はその前に散布しておくのが効果的です。予防でランマンフロアブルがお勧めですが、しっかり茎にかける事が重要ですので、まくぴかを加用するのが効果的です。



7月中旬以前に発病すると被害が大きくなるので、発病が懸念される圃場は開花期前半までの発病を抑えることを目安にしましょう。

(2010年8月 そあら一記)

参考文献

・「北海道病害虫防除提要」北海道植物防疫協会